

# 13th-note

## 2011年1月センター試験

### 数学 I I B ・ 解説

この教材を使う際は

- 表示：原作者のクレジット（「13th-note」または「13th-note & www.ftext.org」）を表示してください。
- 継承：この教材を改変した結果生じた教材には、必ず、原作者のクレジット（「13th-note」または「13th-note & www.ftext.org」）を表示してください。



Ver1.50 (2011-1-20)

第6問は近日掲載します

第1問 [1]

$t = \sin \theta + \sqrt{3} \cos \theta$  の両辺を2乗して

$$\begin{aligned} t^2 &= \sin^2 \theta + 2\sqrt{3} \sin \theta \cos \theta + 3 \cos^2 \theta \\ &= 2 \cos^2 \theta + 2\sqrt{3} \sin \theta \cos \theta + 1 \end{aligned}$$

一方、 $y$  を変形すると、 $\cos 2\theta = 2 \cos^2 \theta - 1$ 、 $\sin 2\theta = 2 \sin \theta \cos \theta$  より

$$\begin{aligned} y &= 2 \cos^2 \theta - 1 + 2\sqrt{3} \sin \theta \cos \theta - 2\sqrt{3} \cos \theta - 2 \sin \theta \\ &= (2 \cos^2 \theta + 2\sqrt{3} \sin \theta \cos \theta + 1) - 2 - 2(\sqrt{3} \cos \theta + \sin \theta) \\ &= t^2 - 2t - 2 \end{aligned}$$

となる。また

$$\begin{aligned} t &= 2 \left( \frac{1}{2} \sin \theta + \frac{\sqrt{3}}{2} \cos \theta \right) \\ &= 2 \sin \left( \theta + \frac{\pi}{3} \right) \end{aligned}$$

である。 $-\frac{\pi}{2} \leq \theta \leq 0$  が定義域だったので

$$\begin{aligned} -\frac{\pi}{2} + \frac{\pi}{3} \leq \theta + \frac{\pi}{3} \leq 0 + \frac{\pi}{3} \\ \Leftrightarrow -\frac{\pi}{6} \leq \theta + \frac{\pi}{3} \leq \frac{\pi}{3} \end{aligned}$$

となるから、 $t$  の取り得る値の範囲は、右欄外の図より

$$\begin{aligned} -\frac{1}{2} \leq \sin \left( \theta + \frac{\pi}{3} \right) \leq \frac{\sqrt{3}}{2} \\ \Leftrightarrow -1 \leq t \leq \sqrt{3} \end{aligned}$$

ここで、 $y$  の式を平方完成すると

$$y = t^2 - 2t - 2 = (t - 1)^2 - 3$$

となって、右欄外のようなグラフになるから  $t = 1$  のとき、最小値  $-3$  をとる。このときの  $\theta$  は

$$\begin{aligned} t = 1 &\Leftrightarrow 2 \sin \left( \theta + \frac{\pi}{3} \right) = 1 \\ &\Leftrightarrow \sin \left( \theta + \frac{\pi}{3} \right) = \frac{1}{2} \\ &\Leftrightarrow \theta + \frac{\pi}{3} = \frac{\pi}{6} \end{aligned}$$

であるから、 $\theta = -\frac{\pi}{6}$  になる。

「基本的な三角関数の問題。教科書レベルのことをきちんと理解しておけば解ける問題。」

- ア : 2, イ : 2, ウ : 3, エ : 1 (以上2点), オ : 2, カ : 2 (以上2点)  
キ : 2, ク : 3 (以上2点), ケ : 6 (1点), コ : -, サ : 1 (以上2点)  
シ : 3 (2点), ス : 1 (1点), セ : 6 (2点), ソ : -, タ : 3 (以上1点)

◀ 13th-note 数学 I I 第4章 (p.11) 『三角関数の相互関係』

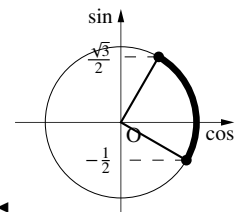
◀ 13th-note 数学 I I 第4章 (p.29) 『倍角の公式』

◀ 逆に、 $t^2$  を  $2\theta$  で表わし

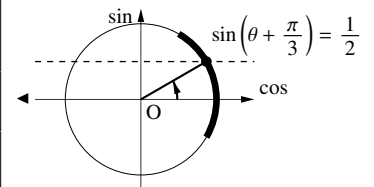
$$\begin{aligned} t^2 &= (\cos 2\theta + 1) + \sqrt{3} \sin 2\theta + 1 \\ &= \cos 2\theta + \sqrt{3} \sin 2\theta + 2 \end{aligned}$$

と変形して、 $y$  に代入しても良い。

◀ 13th-note 数学 I I 第4章 (p.36,37) 『三角関数の合成』



◀ 両辺を2倍した



[2] 条件①について

$$\log_2 \sqrt{x} = \log_2 x^{\frac{1}{2}} = \frac{1}{2} \log_2 x = \frac{1}{2} X$$

$$\log_4 x = \frac{\log_2 x}{\log_2 4} = \frac{1}{2} X$$

であるから

$$\textcircled{1} \Leftrightarrow 12 \cdot \left(\frac{1}{2} X\right)^2 - 7 \cdot \frac{1}{2} X - 10 > 0$$

$$\Leftrightarrow 6X^2 - \overset{\text{チ}}{7}X - \overset{\text{ツ}}{20} > 0$$

$$(3X+4)(2X-5) > 0$$

$$X < -\frac{\overset{\text{ト}}{4}}{\overset{\text{ナ}}{3}}, \quad \frac{\overset{\text{ニ}}{5}}{\overset{\text{ハ}}{2}} < X$$

となる。これを満たす最小の自然数  $x$  は、 $X > 0$  の範囲にあるので

$$\frac{5}{2} < X \Leftrightarrow \frac{5}{2} < \log_2 x$$

$$\Leftrightarrow 2^{\frac{5}{2}} < x$$

$2^{\frac{5}{2}} = 4\sqrt{2} = 4 \cdot 1.414 \dots = 5.656 \dots$  であるから、①を満たす最小の自然数  $x$  は **6** である。

次に、条件②について

$$x = 10 \text{ のとき, } x + \log_3 x = 10 + \log_3 10 < 10 + \log_3 27 = 13$$

$$x = 11 \text{ のとき, } x + \log_3 x = 11 + \log_3 11 < 11 + \log_3 27 = 14$$

$$x = 12 \text{ のとき, } x + \log_3 x = 12 + \log_3 12 > 12 + \log_3 9 = 14$$

であるから、最大の自然数は **11** になる。

「 $X$  の範囲を出すまでは、基本的な対数を含む 2 次不等式の問題。  $x$  の範囲を自然数で求めるときに、対数の定義を改めて聞かれている。

②の方程式は、ぱっと見て厳密に解けないことが分かったらよい。あとは、不等式の意味が分かっていたらよい。」

**チ** : 7 (2点), **ツ** : 2, **テ** : 0 (以上2点), **ト** : 4, **ナ** : 3 (以上2点)

**ニ** : 5, **ヌ** : 2 (以上2点), **ネ** : 6 (3点), **ノ** : 1, **ハ** : 1 (以上4点)

◀ 両辺 2 倍し、 $X^2$  の係数を 6 に合わせた

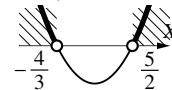
◀ 13th-note 数学 I (p.34,35)

$$\text{『たすきがけ』 } \begin{array}{r} 3 \times 4 \rightarrow 8 \\ 2 \times -5 \rightarrow -10 \\ \hline -7 \end{array}$$

◀ 13th-note 数学 I (p.120,121)

『2 次不等式の解法の基本』

$$y = (3X+4)(2X-5)$$



◀  $x$  も  $\log_3 x$  も  $x$  についての増加関数であり、答えは 2 桁と分かるので、10 から順に調べていく

第2問

C について  $y' = 2x$  であるから,  $P(a, a^2)$  における接線  $l$  の方程式は

$$y - a^2 = 2a(x - a) \Leftrightarrow y = 2ax - a^2$$

になる. これが  $x$  軸と交わるのは,  $y = 0$  のときなので

$$0 = 2ax - a^2 \Leftrightarrow x = \frac{a^2}{2a} = \frac{a}{2}$$

となるから,  $Q\left(\frac{a}{2}, 0\right)$  である.

$a > 0$  のとき,  $C, l$  のグラフは右欄外のようなになるので,

$$\begin{aligned} S &= \int_0^a x^2 dx - \frac{1}{2} \cdot \left(a - \frac{1}{2}a\right) \cdot a^2 \\ &= \left[\frac{x^3}{3}\right]_0^a - \frac{a^3}{4} \\ &= \frac{a^3}{3} - \frac{a^3}{4} = \frac{a^3}{12} \end{aligned}$$

$a < 2$  のとき,  $C, l$  のグラフは右欄外のようなになるので

$$\begin{aligned} T &= \int_a^2 \{x^2 - (2ax - a^2)\} dx \\ &= \int_a^2 (x - a)^2 dx \\ &= \left[\frac{(x - a)^3}{3}\right]_a^2 \\ &= \frac{(2 - a)^3}{3} - 0 \\ &= \frac{1}{3}(8 - 12a + 6a^2 - a^3) \\ &= -\frac{a^3}{3} + 2a^2 - 4a + \frac{8}{3} \end{aligned}$$

$0 \leq a \leq 2$  において

$$\begin{aligned} U &= \frac{a^3}{12} - \frac{a^3}{3} + 2a^2 - 4a + \frac{8}{3} \\ &= -\frac{1}{4}a^3 + 2a^2 - 4a + \frac{8}{3} \end{aligned}$$

であるから, これを微分すると

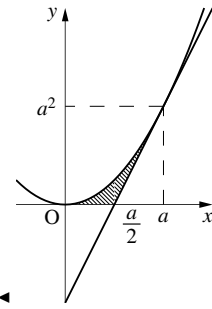
$$\begin{aligned} \frac{dU}{da} &= -\frac{3}{4}a^2 + 4a - 4 \\ &= -\frac{1}{4}(3a^2 - 16a + 16) \\ &= -\frac{1}{4}(3a - 4)(a - 4) \end{aligned}$$

となるから,  $U$  の増減表は次のようになる.

$a$	0	...	$\frac{4}{3}$	...	2
$\frac{dU}{da}$		-	0	+	
$U$		$\searrow$	極小	$\nearrow$	

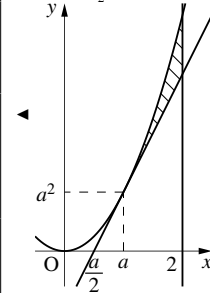
最大値は  $a = 0, 2$  のいずれかでとる.  $a = 0$  のとき,  $U = T = \frac{8}{3}$ ,  $a = 2$  のとき,

$$U = S = \frac{2^3}{12} = \frac{2}{3} \text{ になるから, } a = 0 \text{ で最大値 } \frac{8}{3} \text{ をとる.}$$



◀ 【別解】  $S$  を求める方法は, 以下でも良い.  
 $\int_0^a \{x^2 - (2ax - a^2)\} dx - \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{2}a \cdot | -a^2 |$

$$\text{又は } \int_{\frac{a}{2}}^a \{x^2 - (2ax - a^2)\} dx + \int_0^{\frac{a}{2}} x^2 dx$$



◀ もちろん, 展開して積分しても良いが  
 $\int (x - a)^n = \frac{(x - a)^{n+1}}{n + 1}$  を使うと計算がずつと楽になる.

◀ 次のようにすると計算は楽になる.

$$\begin{aligned} \frac{dU}{da} &= \left(\frac{a^3}{12}\right)' + \left\{\frac{(2-a)^3}{3}\right\}' \\ &= \frac{a^2}{4} - (2-a)^2 \\ &= \left(\frac{a}{2} + 2 - a\right)\left(\frac{a}{2} - 2 + a\right) \\ &= \frac{1}{4}(a + 2 - 2a)(a - 2 + 2a) \\ &= -\frac{1}{4}(a - 2)(3a - 2) \end{aligned}$$

◀  $a = 2$  のとき  $T = 0$  を利用した.

『 $a = 0$  のときは  $S = 0$ ,  $a = 2$  のときは  $T = 0$  であるとして』という問題文に注意.

最小値は  $a = \frac{4}{3}$  のときであり

$$\begin{aligned} U &= -\frac{1}{4} \cdot \left(\frac{4}{3}\right)^3 + 2 \cdot \left(\frac{4}{3}\right)^2 - 4 \cdot \frac{4}{3} + \frac{8}{3} \\ &= -\frac{16}{27} + \frac{32}{9} - \frac{16}{3} + \frac{8}{3} \\ &= \frac{-16 + 96 - 72}{27} = \frac{8}{27} \end{aligned}$$

「微積分について、聞かれていることは基本的で、計算の工夫ができると積分計算もさほど大変でない。」

ア : 2, イ : a, ウ : 2 (以上 3 点), エ : a, オ : 2, カ : 0 (以上 3 点)  
キ : 3, ク : 1, ケ : 2 (以上 5 点)  
コ : 3, サ : 2, シ : 4, ス : 8, セ : 3 (以上 5 点), ソ : 0, タ : 8, チ : 3 (以上 4 点)  
ツ : 4, テ : 3 (以上 5 点), ト : 8, ナ : 2, ニ : 7 (以上 5 点)

$P_3(x_3)$  は,  $P_1(1)$  と  $P_2(2)$  を 3 : 1 に内分する点なので

$$x_3 = \frac{1 \cdot 1 + 3 \cdot 2}{3 + 1} = \frac{7}{4} \text{アイ}$$

になる.  $y_1 = x_2 - x_1 = 1$ であり, また,  $P_n P_{n+2} : P_{n+2} P_{n+1} = 3 : 1$  から,  $P_{n+2} P_{n+1} = \frac{1}{1+3} P_{n+1} P_n$  であり,  $x_n$  と  $x_{n+1}$  の大小は,  $n$  の偶奇によって交互に入れ替わるので

$$y_{n+1} = -\frac{1}{4} y_n \text{エオカ}$$

になる. したがって,  $y_n = 1 \cdot \left(-\frac{1}{4}\right)^{n-1}$  となって,  $\text{①}$  であり

$$\begin{aligned} x_n &= x_1 + \sum_{i=1}^{n-1} \left(-\frac{1}{4}\right)^{i-1} \\ &= 1 + \frac{1 - \left(-\frac{1}{4}\right)^{n-1}}{1 - \left(-\frac{1}{4}\right)} \\ &= 1 + \frac{4}{5} \left\{1 - \left(-\frac{1}{4}\right)^{n-1}\right\} \\ &= \frac{9}{5} - \frac{4}{5} \left(-\frac{1}{4}\right)^{n-1} \text{クケ}$$

となって,  $\text{①}$  である.

次に,  $|y_n| = \left| \left(-\frac{1}{4}\right)^{n-1} \right| = r^{n-1}$  であるから

$$\begin{array}{r} S_n = 1 + 2r + 3r^2 + \dots + nr^{n-1} \\ rS_n = r + 2r^2 + \dots + (n-1)r^{n-1} + nr^n \\ \hline S_n - rS_n = 1 + r + r^2 + \dots + r^{n-1} - nr^n \\ = \sum_{k=1}^n r^{k-1} - nr^n \end{array}$$

であるから,  $\text{①}$ ,  $\text{①}$  になり,  $r = \frac{1}{4}$  に注意してこれを変形すると

$$\begin{aligned} (1-r)S_n &= \frac{1-r^n}{1-r} - nr^n \\ \Leftrightarrow \frac{3}{4}S_n &= \frac{4}{3} \left\{1 - \left(\frac{1}{4}\right)^n\right\} - n \left(\frac{1}{4}\right)^n \\ \Leftrightarrow S_n &= \frac{4}{3} \cdot \frac{4}{3} \left\{1 - \left(\frac{1}{4}\right)^n\right\} - \frac{4}{3} \cdot n \left(\frac{1}{4}\right)^n \\ &= \frac{16}{9} \left\{1 - \left(\frac{1}{4}\right)^n\right\} - \frac{n}{3} \left(\frac{1}{4}\right)^{n-1} \text{セソタ}$$

になり,  $\text{①}$ ,  $\text{①}$  と分かる.

「冒頭の問題文の多さに困惑してしまうと, 先へ進みづらい. また,  $y_n$  が等比数列であることを, 問題の誘導に乗ってできるかも, 一つのポイントになる. それらを超えれば, 教科書レベルの基本的な問題が並んでいる。」

**ア** : 7, **イ** : 4 (以上1点), **ウ** : 1 (1点), **エ** : -, **オ** : 1, **カ** : 4 (以上3点)

**キ** : 0 (1点) **ク** : 9, **ケ** : 5 (以上2点), **コ** : 4, **サ** : 0 (以上3点)

**シ** : 1, **ス** : 1 (以上3点), **セ** : 1, **ソ** : 6, **タ** : 9 (以上2点)

**チ** : 4, **ツ** : 1 (以上2点), **テ** : 3, **ト** : 4, **ナ** : 0 (以上2点)

◀ 13th-note 数学 I 第3章 (p.3)  
『数直線上の内分点』

◀ この議論は難しい. 実際のセンター試験の会場であれば, 問題文から,  $y_n$  が等比数列であることが分かり,  $y_1 = 1, y_2 = x_3 - x_2 = -\frac{1}{4}$  から,  $y_2 = -\frac{1}{4}y_1$  と分かり, 公比が  $-\frac{1}{4}$  を導くことになるだろう.

◀ 最後の項は,  $\frac{4}{3}n$  を残すことができないので,  $\left(\frac{1}{4}\right)^n$  で4を約分した.

第4問

底面の四角形 ABCD が長方形であるから

$$\begin{aligned}\vec{OD} &= \vec{OA} + \vec{AD} \\ &= \vec{OA} + \vec{BC} \\ &= r\vec{a} - r\vec{b} + \vec{c}\end{aligned}$$

となる. L は OD を 1:2 に内分するので,  $\vec{OL} = \frac{1}{3}\vec{a} - \frac{1}{3}\vec{b} + \frac{1}{3}\vec{c}$  であるから

$$\begin{aligned}\vec{AL} &= \vec{OL} - \vec{OA} \\ &= \frac{1}{3}\vec{a} - \frac{1}{3}\vec{b} + \frac{1}{3}\vec{c} - \vec{a} \\ &= -\frac{2}{3}\vec{a} - \frac{1}{3}\vec{b} + \frac{1}{3}\vec{c}\end{aligned}$$

さらに  $\vec{AM} = \vec{OM} - \vec{OA} = \frac{1}{2}\vec{b} - \vec{a}$  なので

$$\begin{aligned}\vec{ON} &= \vec{OA} + \vec{AN} \\ &= \vec{a} + s\vec{AL} + t\vec{AM} \\ &= \vec{a} + s\left(-\frac{2}{3}\vec{a} - \frac{1}{3}\vec{b} + \frac{1}{3}\vec{c}\right) + t\left(\frac{1}{2}\vec{b} - \vec{a}\right) \\ &= \left(1 - \frac{2}{3}s - t\right)\vec{a} + \left(-\frac{s}{3} + \frac{t}{2}\right)\vec{b} + \frac{s}{3}\vec{c}\end{aligned}$$

N が辺 OC 上にあることから,  $\vec{a}, \vec{b}$  の係数は 0 なので

$$1 - \frac{2}{3}s - t = 0, \quad -\frac{1}{3}s + \frac{1}{2}t = 0$$

これを解いて,  $s = \frac{3}{4}, t = \frac{1}{2}$  であるから,  $\vec{ON} = \frac{s}{3}\vec{c} = \frac{1}{4}\vec{c}$  となる.

$\vec{a} \cdot \vec{b}$  について,  $|\vec{a}| = |\vec{b}| = 1, |\vec{a} - \vec{b}| = 2r$  であるから

$$\begin{aligned}|\vec{a} - \vec{b}|^2 &= (2r)^2 \\ \Leftrightarrow 1^2 - 2\vec{a} \cdot \vec{b} + 1^2 &= 4r^2 \\ \Leftrightarrow \vec{a} \cdot \vec{b} &= 1 - 2r^2\end{aligned}$$

であり, 他も同様にして

$$\begin{aligned}|\vec{b} - \vec{c}|^2 &= 2^2 \\ \Leftrightarrow 1^2 - 2\vec{b} \cdot \vec{c} + (\sqrt{3})^2 &= 4 \\ \Leftrightarrow \vec{b} \cdot \vec{c} &= 0 \\ |\vec{a} - \vec{c}|^2 &= (2r)^2 + 2^2 \\ \Leftrightarrow 1^2 - 2\vec{a} \cdot \vec{c} + (\sqrt{3})^2 &= 4r^2 + 4 \\ \Leftrightarrow \vec{a} \cdot \vec{c} &= -2r^2\end{aligned}$$

よって, 直線 AM と直線 MN が垂直になるのは

$$\begin{aligned}\vec{AM} \cdot \vec{MN} = 0 &\Leftrightarrow \left(\frac{1}{2}\vec{b} - \vec{a}\right) \cdot \left(\frac{1}{4}\vec{c} - \frac{1}{2}\vec{b}\right) = 0 \\ &\Leftrightarrow 0 - \frac{1}{4}|\vec{b}|^2 - \frac{1}{4}\vec{a} \cdot \vec{c} + \frac{1}{2}\vec{a} \cdot \vec{b} = 0 \\ &\Leftrightarrow -\frac{1}{4} - \frac{1}{4} \cdot (-2r^2) + \frac{1}{2}(1 - 2r^2) = 0\end{aligned}$$

◀ これを読み落とさないよう注意が必要.

◀ 「 $\triangle OBC$  と  $\triangle OAD$  は合同」であるから

◀ 【別解】 $\triangle OAB$  について余弦定理から  
 $\cos AOB = \frac{1^2 + 1^2 - (2r)^2}{2 \cdot 1 \cdot 1} = 1 - 2r^2$   
 であるので,  $\vec{a} \cdot \vec{b} = |\vec{a}||\vec{b}|\cos AOB = 1 - 2r^2$   
 と求めてもよい.  
 以降の  $\vec{b} \cdot \vec{c}, \vec{a} \cdot \vec{c}$  も同様である.

◀ 四角形 ABCD が長方形なので, 三平方の定理を用いた

◀  $\vec{b} \cdot \vec{c} = 0$  を用いた

$$\Leftrightarrow -\frac{1}{4} + \frac{1}{2}r^2 + \frac{1}{2} - r^2 = 0$$

$$\Leftrightarrow r^2 = \frac{1}{2} \quad \therefore r = \frac{\sqrt{2}}{2}$$

となるから、 $AB = 2r = \underline{\sqrt{2}}$  のときである。

「図に惑わされず、冒頭の  $\triangle OBC \equiv \triangle OAD$ ，底面の四角形  $ABCD$  が長方形であること，を利用し忘れなければ，大変親切な誘導がある問題になっている。」

**ア** :  $a$ ， **イ** :  $b$  (以上2点)， **ウ** : 2， **エ** : 3， **オ** : 1， **カ** : 1 (以上2点)

**キ** : 1， **ク** : 2， **ケ** : 3 (以上2点)， **コ** : 3， **サ** : 2 (以上2点)

**シ** : 3 (1点)， **ス** : 1， **セ** : 4 (以上3点)， **ソ** : 1， **タ** : 2 (以上2点)

**チ** : 0 (1点)， **ツ** : -， **テ** : 2 (以上2点)， **ト** : 2 (3点)



第5問

(1) 30点と比べた差の合計は、右欄外の表から

$$\frac{\cancel{3} + 14 + 0 + 8 - \cancel{1} - 4 + 13 - 7 - 2 + \cancel{4} + \cancel{3} - \cancel{4} + 6 + 0 - \cancel{3}}{15} = \frac{30}{15} = 2$$

となるので、平均値 A は、 $30 + 2 = \underline{32.0}$  アイウ になる。

15人の合計点は  $15 \times A$  点、

上位10人のみの合計点は  $10 \times A_1$  点、下位5人のみの合計点は  $5 \times A_2$  点であるから

$$10A_1 + 5A_2 = 15A$$

$$\Leftrightarrow \frac{2}{\text{エオ}} \frac{1}{3} A_1 + \frac{1}{\text{カキ}} \frac{1}{3} A_2 = A$$

が成り立つ。

(2) 平均との差は、右の表のようになる。

よって偏差の最大値は  $\underline{7.0}$  クケ 点である。

また、分散 B の値は

$$\frac{49 \times 2 + 16 \times 3 + 9 + 4 + 1 + 0 + 0}{10}$$

$$= \frac{160}{10} = \underline{16.00}$$
 コサシス

になる。

標準偏差 C の値は  $\sqrt{16.00} = \underline{4.0}$  スセ

(3) 平均値との差は、4人全て足せば0になるので

$$x + 0 + y + z = \underline{0}, \dots\dots \textcircled{1}$$

最大である D と、最小である F の差は7なので

$$x - z = \underline{7}, \dots\dots \textcircled{2}$$

分散は6.50であるから

$$\frac{x^2 + 0^2 + y^2 + z^2}{4} = 6.5$$

$$\Leftrightarrow x^2 + y^2 + z^2 = \underline{26}, \dots\dots \textcircled{3}$$

②から  $x = z + 7$  なので、①に代入して

$$(z + 7) + y + z = 0 \Leftrightarrow y = -2z - 7$$

これらを③に代入して

$$(z + 7)^2 + (-2z - 7)^2 + z^2 = 26$$

$$\Leftrightarrow z^2 + 14z + 49 + 4z^2 + 28z + 49 + z^2 = 26$$

$$\Leftrightarrow 6z^2 + 42z + 72 = 0$$

$$\Leftrightarrow z^2 + 7z + 12 = 0$$

$$\Leftrightarrow (z + 3)(z + 4) = 0 \quad \therefore z = -3, -4$$

$z = -3$  のとき、 $y = -1$ 、 $x = 4$  になり、 $z = -4$  のとき、 $y = 1$ 、 $x = 3$  になる。

$z < y < 0 < x$  から  $z = -3$  が適する。

D は  $43 + 4 = \underline{47}$  トナ 点、E は  $43 + (-1) = \underline{42}$  ニヌ 点、F は  $43 + (-3) = \underline{40}$  ネノ 点であることが分かる。

(4)  $p = 44$  の人は  $q = 44$  であるから③は誤り。

$p = 43$  の人は  $q = 41$  であるから①は誤り。

$q > 40$  の人は3人しかいないから④は誤り。

番号	差
1	+3
2	+14
3	0
4	+8
5	-1
6	-4
7	+13
8	-7
9	-2
10	+4
11	+3
12	-4
13	+6
14	0
15	-3

番号	平均との差	左の2乗
1	0	0
2	+7	49
3	-3	9
4	-2	4
5	-7	49
6	---	---
7	+4	16
8	---	---
9	---	---
10	+1	1
11	-4	16
12	---	---
13	+4	16
14	0	0
15	---	---

◀ 文字を1つだけにするを考えながら、解く。②式から  $z = x - 7$  として  $x$  だけに揃えても、解くことが出来る。

◀  $F < E < 43 < D$  から  $z < y < 0 < x$  が分かる。

以上から、正しい相関図（散布図）は②であり、図より明らかに  $p, q$  には正の相関があるから①。

- (5)  $r$  が 0 以上 10 未満である、 $G$  の値は、 $q - p$  が正であり、 $0.1p$  より小さければよいので番号 2、5、11 の 3 人。  
 $H$  は番号 1、3、10、13 の 4 人。

番号	$q - p$	$p$	$0.1p$
1	4	33	3.3
2	0	44	4.4
3	4	30	3.0
4	-3	38	3.8
5	1	29	2.9
6	---	---	---
7	-2	43	4.3
8	---	---	---
9	---	---	---
10	4	34	3.4
11	0	33	3.3
12	---	---	---
13	5	36	3.6
14	7	30	3.0
15	---	---	---

◀【別解】②の散布図に 3 本の直線  $q = p, 1.1p, 1.2p$  を描き（これらの直線は  $(20, 20)$  を通らないことに注意）、冒頭の表で確認しながらでも求められる。

◀ $2 + 4 + 3 + 1 = 10$  から、答えの正しいことが確認できる。

「途中で 3 元 2 次方程式を解く必要があるなど、計算が多く、思考力も試される。最後の問題も、実際に  $r$  を求めている時間は時間がかかりすぎる。どのようにすれば、たくさんのデータを手際よくまとめ、知りたいデータを得られるか、日頃からの訓練が必要な問題。」

- ア : 3, イ : 2, ウ : 0 (以上 2 点), エ : 2, オ : 3, カ : 1, キ : 3 (以上 2 点)  
ク : 7, ケ : 0 (以上 1 点), コ : 1, サ : 6, シ : 0, ス : 0 (以上 1 点)  
セ : 4, ソ : 0 (以上 2 点), タ : 0 (1 点), チ : 7 (1 点), ツ : 2, テ : 6 (以上 1 点)  
ト : 4, ナ : 7 (以上 1 点), ニ : 4, ヌ : 2 (以上 1 点), ネ : 4, ノ : 0 (以上 1 点)  
ハ : 2 (2 点) ヒ : 0 (2 点), フ : 3, ヘ : 4 (以上 2 点)